

我在七星寮的室友們



我在 1944 年的春天，順利考上臺北高等學校的高等科理乙班，因為老家在宜蘭，所以被分配搬進了學校宿舍「七星寮」。1945 年 3 月底，我被徵召為學徒兵，直到終戰後的 9 月，才又回到七星寮，並在那裡待到了 1946 年的 3 月底。最初的第一學期，我的室友是文科的央忠夫同學和理乙班的高添一郎同學。央同學在戰後擔任政治記者，負責跑朝日新聞的國會線，還曾經受到我國行政院新聞局招待，久違地來到臺灣。我在新聞局舉辦的晚餐會上見到他，那消瘦的臉頰和老練犀利的記者眼神，一點都不像學生時期那個有些福態的帥哥，不過他還記得我，還特別指名招待我參加晚餐會，讓我非常開心。遺憾的是，央同學後來才值壯年，就因為喉癌過世了。至於高添同學，聽說他成為了東京醫科齒科大學的細菌學教授，不過很可惜的，我和他之間並沒有聯絡。

放完暑假，進到第二學期之後，宿舍房間也跟者改變，這次的室友是文科的

辜寬敏同學和理甲班的吉見吉昭同學。辜同學是當時校內唯一考進文科的臺灣人，我也相當佩服他，他的身材瘦長、面容精悍，看起來就是很有骨氣的模樣。還有，他是一個重度菸槍，考試前總是手夾著香菸猛吸，熬夜唸書準備。記得在某個考試前的晚上，我偷偷問過辜同學。「辜同學，是不是只要抽了香菸，就能精神百倍地熬夜？」「嗯，對啊！要是不相信，你抽一根就知道了。」辜同學親切地朝我遞來一根菸，我用力大吸一口，立刻感到頭暈目眩、天旋地轉，直到隔天早上都不省人事；不難想像，隔天的考試分數自然是慘不忍睹，而辜同學也成了讓純真的我學會抽菸的壞朋友。不過，辜同學是個非常熱愛讀書，又很好相處的人；我這個從宜蘭來的土包子，直到終戰後，才發現原來辜同學是個「大少爺」。至於另一位室友，是從尋常科直升上來的日本人秀才，理甲班的吉見吉昭同學。他在英語、物理的造詣絕佳，回到日本後，從東京工業大學畢業，又在美國取得博士學位，返回母校任教，

蕭柳青

學經臺北二中、臺北高校理科乙類（第 20 屆）、臺大醫學院，為美國華盛頓大學預防醫學碩士、日本東京大學醫學博士。對小兒神經系統、傳染疾患及癲癇研究有重要貢獻，也是早期從事小兒麻痺症的防治者。歷任臺灣大學小兒科講師、副教授，及臺北醫學大學教授、醫學研究所創所所長、小兒科名譽教授，亦曾借調擔任仁濟醫院院長。



後來成為東京工業大學的名譽教授，研究「土壤液化」領域的泰斗。他和夫人目前一起住在京都宇治的老人安養院裡，時常和我用 E-mail 互相聯絡。

終戰後的 9 月，我再度回到七星寮後，和新生們一起在宿舍待到了隔年 3 月底（幾乎所有日本人教授都繼續幫我們上課）。在戰爭期間有著嚴格的燈火管制，因此也不能在宿舍舉辦營火晚會，不過戰後就沒有這層顧慮，我們舉辦了好幾次營火晚會，一邊跳著「臺高舞」一邊盡情玩樂到深夜。

以下的照片，是戰後於七星寮的中庭所拍攝。前排右側第一人名叫井上一三，他在戰後從理乙班轉到文科班，直到隔年回國之前，都住在七星寮裡。井上同學的年紀比我們大了 3、4 歲，話不多，但是溫和穩重。他回到日本後，從東京大學畢業，被宮崎縣的養父母收留，改姓為大原。而改姓後的大原一三，代表自民黨當選過七次眾議員，更在第一次橋本內閣下擔任

農林水產省大臣。1996 年 5 月 4 日，他和李登輝總統兩人獨自對談長達一小時以上，當晚還在秘書陪同下，拜訪了住在臺大宿舍內的王西華教授（20 屆理乙），再加上王源教授（20 屆理乙）和我，四人盡情暢談當年往事的場景，至今憶昔仍是歷歷如繪。



為了紀念 2022 年，臺北高等學校迎接創校一百週年，僅撰此文以表祝賀，在新冠肺炎疫情仍舊嚴峻的狀況下，衷心祈願各位都能常保身體健康。（黃寶萱譯）

七星寮時代の ルームメイト

私は1944年の春、台北高等學校高等科理乙に合格し、實家が宜蘭だったので學寮「七星寮」に寄宿しました。1945年3月末、學徒兵に招集され、終戦後9月に再び七星寮に戻り、翌1946年3月末迄學寮に居りました。最初の一學期の室友は文科の央忠夫君と理乙の高添一郎君でした。央君は戦後朝日新聞國會擔當の政治記者で、我が行政院新聞局に招待されて來台した事が有りました。私も新聞局の晚餐會で久しぶりに遇いました。精練されたジャーナリストの鋭い目付と稍瘦せた顔立ちで、寮時代のボッチャリしたハンサムな面影は全く見られなかった。でも僕の事を良く覚えてくれて、新聞局の晚餐のゲストの一人に指名してくれたのは非常に嬉しかった。惜しくも壯年で咽頭癌に罹り他界しました。高添君は東京醫科齒科大學の細菌學教授を務めていましたが残念乍ら文通はしていません。

夏休みが終り第二學期になってからは部屋が變り、文科の辜寬敏君と理甲の吉見吉昭君と一諸になりました。辜君は當時の

台灣人には珍しい唯一の文科マンで、私もやや感服しましたが、瘦せた長身で精悍そうな面立ち。骨のありそうな男だった。彼はかなりのヘビー・スモーカーで、試験前になると煙草をスパSPA吸って、よく徹夜で勉強した真面目な一面もあった。明日試験を控えた或る夜の事、僕はソット辜君に尋ねた。「辜君、煙草を吸うとそんなに精神百倍で徹夜が出来るのかネ?」、「ウン、そうだよ。嘘と思うなら一本吸ってみな」と辜君御親切に煙草を一本呉れた。我輩一口大きく吸ったのは良かったが、たちまち頭がグラッとして、天井が回轉しそのまま翌朝まで人事不省に陥ちいった。勿論翌日の試験の結果はサンザンな目に會った事は相像に難くない。結局純真な僕に喫煙を覚えさせた悪友は辜君だった。しかし辜君は非常に讀書好きで、人付き合ひが良く、宜蘭出身の田舎者だった私は、辜君が「御曹子」だと知ったのは終戦直後でした。もう一人の室友は日本人尋常科あがりの秀才、理甲の吉見吉昭君。英語、物理が堪能で、歸國後、東京工業大學を卒業、米國で

蕭柳青

台北第二中学校卒業後、台北高等学校（第20期理乙）に進み、その後台湾大学医学院に入学。さらにアメリカのワシントン大学で予防医学修士号、日本の東京大学で医学博士号を取得。小児神経系、感染症及びてんかんの研究に尽力し、先駆者として、小児麻痺（ポリオ）の予防に貢献する。台湾大学小児科学講師、副教授を経て、台北医学大学教授、医学研究所初代所長、小児科名誉教授等を務めた他、仁濟病院にも院長として出向。

PhD を得て母校に戻って教鞭を取り、今では東京工業大学名誉教授、「地盤液状化」の研究の泰斗です。現在は京都宇治の有料老人ホームで夫婦揃って静養中、今でも私とEメールで文通しています。

さて、終戦後九月再び七星寮に戻り新生と共に翌年三月末まで學寮に居ました（それ迄殆どどの日本人教授達が授業を續けて呉れた）。戦時中は嚴重な燈火管制で、寮では fire storm 等行う事が不可能でしたが、戦後そう言う氣づかいが不必要なので、何度か思っきり fire storm や「台高踊り」を夜遅くまで楽しみました。

下面の寫真は戦後七星寮の庭で撮ったもので、前列右一は井上一三君、彼は戦後理乙から文科に轉科し、翌年歸國迄七星寮に居りました。井上君は我我よりも3、4歳年長で無口でおっとりとしたタイプでした。歸國後、東京大學を卒業し、宮崎縣で養子縁組、大原と改姓しました。その大原一三が自民党所屬の眾議員に七回も當選

し、第一次橋本内閣で農林水産省大臣を務めました。1996年5月4日に李登輝總統と一時間以上も二人っきりの對談を致しましたとの事。その晩、大原氏は秘書を伴って台大宿舍に住んで居る王西華教授（20届理乙）の宅を訪れ、王源教授（20届理乙）と私をまじえて昔話に花をさかせた事は、今でも私の腦の中に鮮明に残っています。



2022年、台北高等學校創立百周年を紀念して、拙文を綴りました、コロナ疫情嚴峻の折り、皆様の御健康を祈って擱筆します。